生活単位の個人化という視点からみた共働き夫婦の居住空間の構成原理に関する考察

集住住宅の空間構造に関する基礎的研究 その3

SPATIAL UNITS ARRANGEMENTS OF THE DOUBLE-INCOME COUPLE
FROM THE VIEW POINT OF THE INDIVIDUALIZATION
A basic study on the spacial structure of multi-story housing  Part 3

安枝 英俊*, 高田 光雄**

Hidetoshi YASUEDA and Mitsuo TAKADA

This paper aims to clarify the composition of the spatial units arrangements of the double-income couple from the view point of 'Individualization'. For this analysis, the planning method of dwellings by scenario approach was adopted to the 5 couples. This method consists of two processes, writing scenario of self-realization and making the figure of spatial units arrangements. The findings are as follows.

1) Except for the office-space, no private space is directly connected to the common corridor, and, if the couple admit another individual to use common-space, guest-space can not connect to the common corridor.

2) Most of the equipments are set up at the common-space. But, in the figure of spatial units arrangements 10 years later, some of the equipments are set up at the private space.

Keywords: Control, Individual, Spatial structure, Scenario approach, Double-income couple

制御、個人、空間構造、シナリオ・アプローチ、共働き夫婦

1. 研究の背景・意義・目的

高齢化、少子化、女性の社会参加などの進行により、とりわけ大都市では、単身者の増加、家族の多様化が急速に進み、L.D.K型平面に代表される核家族を基本とした住宅計画や住宅供給に限界が見え始めている。本稿は、これを背景として生活単位の個人化に対応した住宅計画論を提示すること目的とした一連の研究のひとつであり、前稿①、前稿②に引き続き論文である。

前述のような社会の変化は「個人化」との増加が見られる。ここで「個人化」とは、例えば、単独世帯の増加といった世帯の変化に係わる概念ではなく、家族の中でも一人ひとりの独立性が強まるといった生活単位の変化に係わる概念である。高齢化、少子化、女性の社会参加といった社会の変化により、個人のライフストーリーの選択肢は多様化し、個人に自らのライフストーリーを自己決定することが求められる。当然のことながら、個人が自らのライフストーリーを自己決定することになれば、生活単位の個人化が進行することになる。

本稿では、前々稿および前稿を踏まえて、生活単位の個人化に対応した住宅計画の理論的な検討を行い、これを踏まえて、生活単位の個人化に対応した住宅計画手法を提案し、シナリオ・アプローチによる住宅計画手法の開発を行った。

本稿では、5組の共働き夫婦に対してこの手法を適用することにより、5組の共働き夫婦における居住空間の構成原理を明らかにすることを目的としている。

2. 本稿に関連する既往の研究

これまで、夫婦を1単位としてみるのではなく、2単位として捉える視点から行われた研究には、共働き夫婦の生活実態の住要求を把握したもの③、成人男女を対象として、住居内における行動と空間がどのように対応しているのかを統計的データ解析により分析したもの④、住宅提案にみられる生活・空間の分類から、近未来の家族と住宅の方向性の把握を試みたもの⑤、などがある。これら既往の研究は、個人化の進行を踏まえ、これからの住宅計画の課題について検討する点で、本稿の趣旨に近いものである。

これらの既往の研究に対して、本稿では、統計的データ解析や住宅提案から分析を行うのではなく、生活単位の個人化に対応した住宅計画手法の開発を行い、生活単位が個人化していると考えられる共働き夫婦を対象とした試験を行うことにより、共働き夫婦における居住空間の構成原理を明らかにすることを試みている。

3. 生生活単位の個人化に対応した住宅計画の理論的検討

3-1. 制御の概念

生活単位の個人化とは、個人が生活行為を自らの意思で行うことである。したがって、生活単位の個人化に対応した居住空間では、個人が空間における生活行為を自らの意思で行うことが必要である。

* 京都大学大学院工学研究科 博士後期課程修了(工学)
** 京都大学大学院工学研究科建築学専攻 助教授・博士(工学)

Graduate Student, Department of Architecture and Architectural Systems, Graduate School of Engineering, Kyoto Univ., M. Eng.
Assoc. Prof., Department of Architecture and Architectural Systems, Graduate School of Engineering, Kyoto Univ., Dr. Eng.

NII-Electronic Library Service
そのためには、その前提として、個人が、空間に対して自ら意思決定を行うことができなければならない

前稿では、空間に対して自ら意思決定を行うことを「制御」と定義し、空間に対して自ら意思決定を行うことのできる主体を「制御主体」と定義した。さらに、前述の「制御の概念」が成立するためには、①空間に対して自ら意思決定を行うことのできる主体が存在すること、②空間に対して物理的な境界が存在すること、の2つの条件が必要であるとした（図1）。

3 – 2. 制御主体に関する検討

前稿では、前述の2つの条件のうち、①の制御主体に着目し、「制御の概念に基づく空間構造モデルを構築した（図2）。

前稿で提示した空間構造モデルでは、「制御」という概念に基づいて、「制御主体が単数しか存在しない空気（以下、制御主体が単数の空間）」「制御主体が複数存在する空間（以下、制御主体が複数の空間）」「制御主体が存在しない空間（以下、開いた空間）」という3つの単位空間を定義した。

制御主体が単数の空間では、制御主体だけが空間に対して意思決定を行うことができるのではなく、制御主体は、自らの意思で行為を行うことができる。それに対して、「制御主体が複数的空間」では、制御主体が行うことができる行為について、複数の制御主体の間で意思決定を行う必要がある。制御主体は、複数の制御主体の間でありかじめ合意形成される行為のみ自らの意思で行うことができる。

前稿では、「制御主体が複数の空間」における制御主体の行為について検討を行い、制御主体が単数で行為を「単独行為」と、制御主体が他の主体と行為を「相互行為」と定義した。その上で、複数の制御主体が「制御主体が複数の空間で行うことのできる行為」に関して合意形成を行う場合についての検討を行った。また、制御主体が複数の空間で単独行為をできる場合には、合意形成によって、制御主体間の主体と相互行為を行うことができるものとし、制御主体と制御主体以外の主体が行うことができる行為に関するルールを図3のように類型し、各ルールによって、単位空間の連結関係が規定されることを明らかにした（図4）。

3 – 3. 境界に関する検討

本稿では、前稿までの検討に加えて、前述の「制御の概念」が成立するための2つの条件のうち、②の物理的な境界に着目した検討をう

複数の個人が合意形成を行ったルールが変更になれば、それに伴い、単位空間の連結関係が変更になるが、単位空間の連結関係の変更を実現するためにには、制御主体が物理的な境界に対して意思決定を行うことが必要である。したがって、本研究では、意思決定の対象を、空間における制御主体の行為と、空間を実体化する物理的な境界として検討を行う。

物理的な境界については、「制御主体が存在する空間」の境界上のあるものと、「制御主体が存在する空間」の周縁上のものという2種類の境界がある（図5）。

「制御主体が存在する空間」の境界上の存在する物財は、制御主体だけで意思決定を行うことができる。それに対して、「開いた空間」と「制御主体が存在する空間」の境界上の物財は、「開いた空間」
制御主体が存在しないので、制御主体だけでは意思決定を行うことができない。しかし、単位空間の連絡関係は、制御主体の空間に対する意思決定による効果を示すため、本研究では、「聞いた空間」に対する入口の設置に関してのみ、「制御主体」だけで意思決定を行うことができるものとする。

以上の検討から、制御主体が自らの意思で行為を行う空間、及び、空間の境界にある物財に対する意思決定を行うことの必要性が理論的に導かれる。

4. 生活単位の個人化に対応した住宅計画手法の開発

4-1. シナリオ・アプローチによる住宅計画手法

前章での検討によれば、生活単位の個人化に対応した住宅計画においては、自己決定したライフストーリーを実現するため、空間および物件に対して個人が意思決定を行うことが必要である。したがって、生活単位の個人化に対応した住宅計画には、実現すべきライフヒストリーを明らかにした上で、これを実現するための空間および物件に対する合意形成過程が必要になる。そこで、本研究では、生活単位の個人化に対応した住宅計画手法として、シナリオ・アプローチによる住宅計画手法の開発を行った。

シナリオ・アプローチによる住宅計画手法は、大別すると自己実現シナリオの作成と単位空間配置図の作成という2つのプロセスから構成される（図6）。自己実現シナリオの作成は、個人が自ら意思決定したライフヒストリーをシナリオで描くプロセスである。単位空間配置図の作成は、自己実現シナリオを踏まえて、生活の一部を共有化する可能性をもつ全員が、共同利用空間の調整を行いつつ、空間化するプロセスに対応する。

4-2. 自己実現シナリオの作成

自己実現シナリオとは、自立した個人が、現在および将来の自らの生活を熟考した上で、よりよく生きるために実現したいと考える一連の面構成として描かれた生活像を意味する。将来の生活像については、被験者に10年後への生活を制約条件がない場合とある場合に分けて記述することを求める。ここで、10年後の自己実現シナリオ（制約条件なし）は、就学・就業・結婚・出産など、選択的条件に対して自己決定を行ったものである。また、10年後の自己実現シナリオ（制約条件あり）では、選択的条件に加えて、環境の変化・要介護・構成員の増減などの選択的条件を考慮したものである。たとえば自己実現シナリオ（制約条件あり）では、選択的条件に加えて、環境の変化・要介護・構成員の増減などの選択的条件を考慮したものである。4-3. 単位空間配置図の作成

単位空間配置図の作成は、自己実現シナリオを踏まえて他の個人と共同利用空間の調整を行い、シナリオを空間化するプロセスである。したがって、現在、10年後（制約条件なし）、10年後（制約条件あり）の3種類の単位空間配置図が、個人としての自己実現シナリオを踏まえて作成される。自己実現シナリオは、個人により作成されるが、単位空間配置図は、個人の自己実現シナリオの調整を含めて、生活の一部を共有化する可能性をもつ者全てが共同作業として作成する。

単位空間配置図は、図7の作成過程に示すように、前章での検討をふまえ、個人が自らの意思で行為を行う空間、及び、空間の境界上の物財に対して意思決定を行いながら作成する。検討単位空間配置図は、A3サイズのシート上に、参加者が相互に調整を行いながら、75mm角の正方形シールに必要な室を記入し貼り、さらに設備を示す色分けられた直径8mmの円形シールをその上に貼りつけていく（図8）。必要な室については、個室、共用室、接客室・仕事場という3種類の色分けられた75mm角の正方形シールを使用する。必要な室と設備を記入した後、間仕切りの種類と共用廊下からのアクセスを記入する（図10）。

5. 共働き夫婦を対象とした実験

5-1. 実験の概要

（1）実験の対象

共働き夫婦にシナリオ・アプローチを適用するためにあたり、先ず、夫が30歳代半ばの5組の共働き夫婦、計10組を被験者として選定した。次に、夫と妻それぞれに、個人の自己実現シナリオ作成を目的としたシナリオ・アンケートへの記入を依頼した。さらに、これをふまえて、各夫婦に、単位空間配置図の共同作成を依頼した。依頼に当たっては記入例を含むマニュアルを添付し、不明箇所があ

---

図6 シナリオ・アプローチによる住宅計画手法の概要
（2）自己実現シナリオ

各被験者には依頼した自己実現シナリオの作成は、10年後の自己実現シナリオ（制約条件なし）及び、制約条件ありと生活アレンジメントからなっている。また、制約条件ありシナリオは、「地球環境問題が深刻化する」、「夫が事故に遭い、車椅子生活を始める」という2つの制約条件を考慮したものである。さらに、生活アレンジメントとは、現在、10年後（制約条件なし）10年後（制約条件あり）の居間・食事の準備・子供の世話・接客の仕方を、夫と妻別に尋ねたものである。

（3）単位空間配置図

各被験者の個人としての自己実現シナリオを踏まえて、現在、10年後（制約条件なし）、10年後（制約条件あり）の3種類の単位空間配置図を作成を依頼した。自己実現シナリオの作成は、夫と妻のそれぞれの作成を依頼したが、単位空間配置図は、それぞれの自己実現シナリオの調整を含めて、夫婦の共同作業としての作成を依頼した。

5－2．自己実現シナリオの分析

5組の共働き夫婦の夫と妻がそれぞれ作成した自己実現シナリオの結果を、表1に示す。

（2）夫婦Ⅰ

夫は、現在、工学デザイナーとして住宅勤務をしており、10年後（制約条件なし）では、短期大学の非常勤講師を辞めて、工学デザイナーとして住宅外でデザイン事務所を経営している10年後（制約条件あり）では、住宅でデザイン事務所を開設する。

妻は、現在、会社員であり、10年後（制約条件あり）は現在勤務している会社で会社員として勤務をする10年後（制約条件あり）では、夫のデザイン事務所を手伝い、同じ事務所で勤務する。

夫は、現在、食事の準備を全て行うが、10年後（制約条件なし）は、食事の準備を行わないと回答している。一方、妻は、現在は食事の準備を行わないが、10年後（制約条件なし）と10年後（制約条件あり）では、食事の準備を行うと回答している。

（2）夫婦Ⅱ

夫は、現在、会社員であり、10年後（制約条件なし）も現在勤務している会社で会社員として仕事を続けているが、10年後（制約条件あり）では、会社辞め、在宅で仕事をしている。

妻は、現在、会社員であるが、10年後（制約条件あり）では、住宅外で雑務を経営している。10年後（制約条件あり）では、経済的基盤を確立するために、会社員として仕事を続けるが、家事負担が増えるため、週4日勤務で契約する。

夫婦Ⅱは、現在、夫の母親と同居しているので、平日の、夫の母親が食事の準備をしても、休日は、妻が夕食の準備を行う。夫は、現在、10年後（制約条件なし）10年後（制約条件あり）とともに、食事の準備を行わないと回答している。一方、妻は、10年後（制約条件なし）では、朝食と夕食の準備を行うが、10年後（制約条件あり）では、現在のように、平日の、夫の母親が食事の準備を行い、休日は夕食のみ準備を行うと回答している。

（3）夫婦Ⅲ

夫は、現在、中学教師であり、10年後（制約条件なし）も、同じ教師の仕事をしている。10年後（制約条件あり）でも、車椅子生活をしながら、教師の仕事を持っている。

妻は、現在、会社員であるが、10年後（制約条件なし）は、現在勤務している会社の会社員として在宅で仕事をしている。10年後（制約条件あり）では、夫の介護を行うために、現在勤務している会社を辞め、時間の自由度が高い職種に転職する。

妻は、現在、夕食の準備を行っているが、夫は、現在、10年後（制約条件なし）10年後（制約条件あり）ともに、食事の準備を行わないと回答している。一方、妻は、10年後（制約条件なし）では、朝食・夕食の準備を行うが、10年後（制約条件あり）では、食事の準備を行わないと回答している。

（4）夫婦Ⅳ

夫は、現在、会社員であり、10年後（制約条件なし）も現在勤務している会社で会社員として仕事を続けているが、10年後（制約条件あり）では、会社辞め、在宅で仕事をしている。
<table>
<thead>
<tr>
<th>会社</th>
<th>自己実現シナリオ</th>
<th>生活面面</th>
<th>10年後（制約条件なし）</th>
<th>10年後（制約条件あり）</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>会社１</td>
<td>現在、工務設計者として在宅勤務しており、延べ大学の非制約の条件で経験を積んでいます。</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>会社２</td>
<td>現在、会社員であり、10年後も同社に勤務しています。現在の勤務場所は、純粋な設計事務を楽しんでいる。</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>会社３</td>
<td>自宅近くの住居を購入し、10年後に2階、家族サービス業を手伝うと仕事をすること。</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>会社４</td>
<td>現在、中学校の教員をしている。10年後も現在と同じように、帰宅後だけの仕事は経験をしている。</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>会社５</td>
<td>現在、会社員であるが、10年後も同じ会社に勤務している。</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>会社６</td>
<td>現在、会社員であり、10年後も同じ会社に勤務している。子供が大きくなっているので、週末には、親子で料理をしながら過ごす。</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>会社７</td>
<td>現在、会社員であるが、10年後も同じ会社に勤務している。</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>会社８</td>
<td>現在は、会社員であり、10年後も現在と同じように、帰宅後だけの仕事は経験をしている。</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

務している会社で会社員として仕事を続けているが、10年後（制約条件あり）では、現在勤務している会社の会社員として在宅で仕事をしている。

妻は、現在、会社員であり、10年後（制約条件なし）も現在勤務している会社で会社員として仕事を続けているが、10年後（制約条件あり）では、夫の介護を行うために、現在勤務している会社の会社員として、週1〜2回で在宅で仕事を行う。

妻は、現在、朝食、夕食の準備を行っているが、夫は、現在、10年後（制約条件なし）、10年後（制約条件あり）ともに、食事の準備を行わないと回答している。一方、妻は、10年後（制約条件なし）と10年後（制約条件あり）では、夕食の準備のみを行い回答している。

（５）夫婦

夫は、現在、会社員であり、10年後（制約条件なし）も現在勤務している会社で会社員として仕事を続けているが、10年後（制約条件あり）では、現在勤務している会社の会社員として在宅で仕事をしている。

妻は、現在、会社員であるが、10年後（制約条件なし）には、自宅で個人事業を経営する。10年後（制約条件あり）では、自宅で個人事業を経営し、夫の介護は、子供と協力しながら行う。
妻は、現在、朝食・夕食の準備を行っているが、夫は、現在、10年後（制約条件なし）は、食事の準備を行わず、10年後（制約条件あり）は朝食・昼食の準備を行うと回答している。一方、妻は、10年後（制約条件なし）では、朝食・夕食の準備を行い、10年後（制約条件あり）では、朝食・夕食の準備を行うと回答している。

5-3. 単位空間配列図の分析
5組の共働き夫婦が作成した15の単位空間配列図を、図8に示す。①
(1) 夫婦I

現在は、夫の仕事場と妻の個室、10年後（制約条件なし）は、夫の個室と妻の個室がある。10年後（制約条件あり）には、夫婦の仕事場と夫の個室と妻の個室があるが、夫婦の仕事場にはトイレが設置され、夫の個室にはトイレ・バス・洗面が設置されている。夫の個室と妻の個室は間仕切りDで仕切られている。

現在、10年後（制約条件なし）ともに、リビング・ダイニングと夫婦の個室は間仕切りBで仕切られている。夫婦は、生活アンケートで、夫と妻ともに、接客はリビング・ダイニングで行うと回答していることから、リビング・ダイニングを来客が直接出入することのできる空間として認めていることがわかる。また、現在と10年後（制約条件あり）の夫の仕事場は共用廊下から直接出入すること
ができるため、夫の仕事に関する来客に対しては、夫の仕事場で接客を行うことがわかる。

（2）夫婦Ⅱ

現在、10年後（制約条件なし）は、夫には個室がないが、妻には個室がある。夫の在宅時間が短いため個室が必要だが、妻は夫の経営の中居を務めるため、自分の空間を確保するために個室が必要であると考えられる。また、10年後（制約条件なし）では、妻は自宅で書斎を設けて、自宅でも仕事があり、妻の仕事場には、トイレが設置されている。10年後（制約条件あり）は、夫が在宅勤務を行う仕事場と夫の宿泊室である。個室に近い書斎か浴室で洗面が施されている。

現在、10年後（制約条件あり）、10年後（制約条件なし）ともに接客室があり、現在は、共用階段から直接アクセスすることができる。また、10年後（制約条件なし）は妻の仕事場、10年後（制約条件あり）は、夫の仕事場と、それぞれ、共用階段から直接アクセスすることができる。このことから、夫婦Ⅲでは、来客がリビング・ダイニングに入室することを認めていないことがわかる。

（3）夫婦Ⅲ

現在、10年後（制約条件あり）、10年後（制約条件なし）ともに、夫と妻のそれぞれに個室がある。10年後（制約条件なし）、10年後（制約条件あり）では、妻は在校勤務を務めるが、夫は自宅での仕事場であるため、個室が必要である。個室に近い書斎か浴室で洗面が施されている。また、リビング・ダイニングと夫婦の寝室がある。妻は在校勤務を務めるが、10年後（制約条件あり）、10年後（制約条件なし）ともに接客室がある。さらに、生活アシスタントとして、夫と妻ともに、接客がリビング・ダイニングで行うことが確認されていることから、来客がリビング・ダイニングに入室することを認めていることがわかる。

なお、10年後（制約条件なし）では、生活アシスタントの中では、夫は別室で就寝、妻は同室で就寝しているが、単位空間配置図では、夫婦の寝室を同室で就寝となっている。

（4）夫婦Ⅳ

現在、10年後（制約条件あり）、10年後（制約条件なし）ともに、夫と妻ともに個室がある。10年後（制約条件あり）には、夫と妻ともに在校勤務を行うが、10年後（制約条件なし）では、リビング・ダイニングと夫婦の寝室に接客室があり、10年後（制約条件あり）では接客室にトイレが設置されている。個室切りにリビング・ダイニングと夫婦の寝室は、個室切りBで仕切られているが、リビング・ダイニングを接客室は個室切りCで仕切られている。生活アシスタントとして、夫と妻ともに、接客がリビング・ダイニングで行うことが確認されていることから、接客室が共用廊下から直接アクセスできないこと、リビング・ダイニングと接客室が個室切りBで仕切られていることから、夫婦Ⅳでは、来客がリビング・ダイニングに入室することを認めていないわけではないが、来客はリビング・ダイニングと接客室に進入できるが、来客によって、接客を行う空間を使い分けることを意図していると考えられる。

なお、現在の夫婦の寝室について、生活アシスタントで夫婦別室と回答しているのに、夫婦の寝室があるのは、夫と妻のいずれかが在校で子供と就寝しているためである。

（5）夫婦Ⅴ

現在は、10年後（制約条件あり）は、リビング・ダイニングと夫婦の寝室で使用するため、10年後（制約条件なし）では、10年後（制約条件あり）は、10年後（制約条件なし）は、10年後（制約条件なし）で、個室で就寝を務めるが、個室で就寝を務めるため、個室は仕事場となる。個室は2つで、1つが接客室として設置されている。また、リビング・ダイニングと夫婦の寝室は、個室切りBで仕切られているが、リビング・ダイニングと接客室は個室切りCで仕切られている。生活アシスタントとして、接客について、夫は、現在は家族室、10年後（制約条件あり）、10年後（制約条件なし）では接客室と回答し、妻はいずれも家族室と回答しているが、共用廊下から直接アクセスすることのできない接客室があることから、来客がリビング・ダイニングに進入することを認めており、来客によって接客を行う空間を使い分けることを意図していると考えられる。

6. 結論

5組の共働き夫婦を対象として、「シナリオ・アプローチによる住宅計画方法」を適用して得られた15の単位空間配置図を相互に比較検討することにより、5組の共働き夫婦の居住空間の構成原理は以下の通りである。

①個室の空間については、夫と妻それぞれに個室があり、夫と妻のそれぞれが共用の生活ともに独立した生活を確保している空間構造と、夫と妻の両方、あるいはいずれかに個室がなく、夫婦が一体的に生活していることをとみることのできる空間構造が見出された。個室と共用廊下の連続関係については、仕事場を除いて、個人の空間は、リビング・ダイニングを介して共用廊下に連続してあり、共用廊下に直接連絡するものは見られなかった。

②複数の個人の空間には、リビング・ダイニング、夫婦の寝室、接客室があるが、接客室については、夫婦Ⅱを除いて、共用廊下に直接連絡するものはなく、リビング・ダイニングと、開け放す可能な開口のある仕切で仕切られていることがあった。夫婦Ⅱのように、来客がリビング・ダイニングに進入することを認めていない場合には、共用廊下に直接連絡する。

③現在、および10年後（制約条件なし）では、全ての設備を共用で利用する場合が多く、個室に設備を設置するものはほとんど見
参考文献
1) 安藤英敏、高田光雄：居住空間の空間構造に関する基礎的考察、日本建築学会計画系論文集 第523号、pp.117-123、1999.9
2) 安藤英敏、高田光雄：住・空間に関する研究 その1～2、日本建築学会計画系論文集 No.564、pp.107-112、2003.2
3) 安藤英敏、高田光雄、加茂みどり：ノンファミリーによる住居設計手法の有効性～ノンファミリーによる住宅計画手法の開発に関する研究 その1、日本建築学会学術講演概要集、2000.9
4) 安藤英敏、高田光雄、加茂みどり：自己実現ノンチャーの住居計画手法の開発に関する研究 2、日本建築学会学術講演概要集、2000.9
5) 安藤英敏、高田光雄、加茂みどり：住居空間配置図の作成 ～ノンファミリーによる住居計画手法の開発に関する研究 その3、日本建築学会学術講演概要集、2000.9
6) 高田光雄、安藤英敏他：図面とベースしたハウスリングに関する住居設計の研究、住宅総合財団財団研究第37号、pp.113-124、2001.3
7) 高田光雄、近倉真一、安藤英敏他：大阪ガス実験施設住宅NEXT2 1号 第1部設計便覧書、大阪ガス株式会社、2000.8
8) 山崎善明、橋本範：時間による生活の複雑化～生活時間からみた行動と住宅空間の関係に関する研究、その1、日本建築学会計画系論文集 No.491、pp.67-74、1997.1
9) 山崎善明、行動類型と空間利用型の対応関係～生活時間による生活室内の行動と空間の対応関係に関する研究、その2、日本建築学会計画系論文集 No.504、pp.111-118、1998.2
10) 山崎善明、生活時間のタイブ別分析法～生活時間に基づく生活室内の行動と空間の対応関係に関する研究、その3、日本建築学会計画系論文集 No.538、pp.61-68、2000.12
11) 大橋秀敏、高橋恒英：これらの家族と住宅の移行～住宅提案にみられる生活・空間・類型分析の分析法～、日本建築学会学術講演集 No.8、pp.163-168、1999.6
12) 塩野球隆、橋本範：秋葉春樹、長谷川和、西尾智彦、高橋豊平：生活習慣からの変化に伴い家族の住居に関する研究 その4～共働き家族の生活実態の要因、日本建築学会学術講演集概要集、1999.9
13) 大橋秀敏、塩野球隆、秋葉春樹、長谷川和、西尾智彦、高橋豊平：これら2つの家族の移行～これからの家族の建立、日本建築学会学術講演集概要集、1999.9
14) 日本建築学会 建築設計委員会：家族、家族、家族と住まい～ヒューマンサポートの考え方と住宅計画、日本建築学会、1999.9
15) 日本建築学会 都市計画委員会、農村計画委員会：まちづくりのシナリオ～自分たちの住まい～、日本建築学会、2000.9
16) 高田光雄、伊東康子：シナリオ・アプローチによる都市総合関連施設・サービスに関する研究 その1～その2、日本建築学会学術講演集概要集、pp.239～242、1999.9
17) 伊東康子、高田光雄：シナリオ・プランニングによる住居スタイルの設定に関する研究、都市住宅23号、pp.96～99、1999.6
18) 高田光雄：日本における集合住宅計画の変遷、放送大学教育振興会、1998
19) 高田光雄：「多様な住宅計画プロセス」住環境の計画構想集編集委員会『住環境の計画 住住宅2号』計画集、pp.239～242、1998
20) 高田光雄：「多様な住宅計画プロセス」住環境の計画構想集編集委員会『住環境の計画2号』計画集、東京書籍、1998
21) 畠野真崇：近代建築の成立と終結、岩波書店、1994
22) 目黒信夫：個人化する家族、築聞、1987
23) 群馬健一：平成3年版住宅生活ガイド、大藏省印刷局、2001
24) 21世紀住生活研究会：住生活ビジョン21、住宅新報社、1996
27) 藤原雅之：既存住宅建築一新聴する近代家族と建築的課題～住まいの図書館出版、1997
28) 山本瑞穂：住居論、住まいの図書館出版、1993
30) Kees van der Heijden：Scenario Planning-strategic thinking and decision making～シナリオ・プランニング「戦略的思考と意思決定」、ダイヤモンド社、1998

（2002年12月10日最終受付、2003年4月1日採用決定）